
霊界電話

紅凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊界電話

【Nコード】

N4944P

【作者名】

紅凰

【あらすじ】

Twitterで呟いたtnovelをssにしてみました。

最先端の技術であの世の人と会話出来る代物が開発された。その名も「霊界電話」と言うらしい。

そんな夢のような話を聞いたのが半年前。ちょうど最愛の彼女が亡くなって3ヶ月の時だった。

こんな都市伝説じみたものは信じたくなかったが、彼女の声が聞けるならなんだってしてやろうと思った。

例の「霊界電話」というやつはどうも青森にあるらしい。

しかも一回の利用料金が10分100万円とかなり破格ということだから俺は必死こいて働いた。

来る日も来る日も朝昼晩までほとんど休まずに働きつめた。

身体の事なんて気にならなかった。

ただ、彼女の声が聴きたい。

それを支えにして無我夢中だったんだ。

それから半年で、もともとの貯金と合わせなんとか250万もの金を作ることが出来たのだった。

そして今。

俺は青森にある「霊界電話」の前に並んでいた。

事前に係員に俺の前には長蛇の列。後ろにも伸びている。

皆、これから思い思いの故人に連絡するのだらう。

皆一様に緊張した面持ちで並んでいる。

だが、俺だけは笑っていた。

遂に彼女の声が聴けるのだ。

彼女と話せるのだ。

笑いが込み上げて来るのも仕方ない。

待つこと四時間。

俺の前に並んでたやつの通話が終了したらしい。

嗚咽を漏らしながら足早に去っていった。

俺の気分は最高潮に達する。何を話そうか？

彼女は喜んでくれるか？

とりとめのない妄想を、己の中で繰り広げながら受話器に歩み寄る。200万と引き換えに手に入れた彼女の番号用紙を手に。「プルルル：プルルル：、こちらは霊界電話サービスです。お客様のお掛けになったお相手は霊界におられません。まだ成仏していない可能性が」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4944p/>

霊界電話

2010年12月14日16時13分発行